

歴史の恨みを越えて、真の国際交流を

社会科学研究所博士課程前期
経済学専攻二学年 沈立仙

留学生としてよく聞かれる質問に、「日本に対する印象はどうですか」というものがあります。問題そのものはさほど難しいものではないのですが、私はこのような問題に答える際に、常に一種のためらいを覚えるのです。特に、私のようなアジアの留学生、自国と日本のこれまでの歴史を知っている者は、だれでもそうではないかと推察します。

近代の歴史を紐解くと、戦争に伴う様々な惨禍が目に見え込んできます。二回の大戦で犠牲となった人間の数は実に夥しいものです。太平洋戦争では侵略国であった日本もまた、広島・長崎への原爆投下という極めて苛烈な犠牲を支払いました。アジア諸国も戦禍に巻き込まれ、その悲痛な経験は今でも人々の心の底から消え去ってはいません。戦争の悲惨な体験を持つていない私は、教育を通じて見聞しているだけですが、それでもこのような悲惨な戦争が一刻も早く消失することを願ってやみません。被爆地としての広島に

生きていけばよいのだ。——という言葉は、確かに正しく、美しいものでしょうし、私達にできることは結局それだけしかないのかもしれない。しかし、実際に太平洋戦争で辛酸を嘗めた人達が、私の国にも、アジア諸国にも、そして日本にも沢山生きています。ここ広島で、時折テレビに映し出される被爆者の姿を目にするとき、私は「過去の歴史の過ちを教訓にして〜」などと軽々しく口にしてはならないのではな

私の年代の人間が、過去の歴史にばかり拘り続けるというのも、やはり良いことではないでしょう。

私達留学生は、広島で様々な援助を受けています。奨学金やバザーなど、私達の生活にとって非常に有益なものです。また、物質的なだけでなく、精神的交流の企てを行っている人達も大勢います。異なる言語、生活背景を持つ人間が精神的に交流を交わすということは本当に難しいことだと思いません。私は時々、相手が好意でしてくれているのは分かっているのに、その人の行為が好きになれないという複雑な心境に苦しめられることがあります。また、自分が台湾について知識があると言いたいからでしょうか、「台湾は昔日本の植民地だったんだよ」ということを無邪気に口にする人もいます。



いかとも感じるので。

それでも、過去に起こったことはどうしようもないことです。戦争体験を持つアジア諸国の人々にとって、日本はこれからも「かつての侵略国」であり続けるでしょうし、それは誰にもどうしようもないことです。その一方で、私にとって、そして私の周囲のアジアの若者にとって、日本と自国との関係は、「戦争」或いは「侵略」の関係だけに還元されるものではありません。

私は、このような発言を聞くたびに、いいようのない気持ちにとらわれます。しかし、いづれにせよ、このような精神的交流を模索する動きは発展させられなければならないと思います。

日本には「恩讐の彼方に」という小説があります。復讐に燃える人間が、仇敵の真摯な情念に心を動かされ、いつか彼の復讐心が和らいでゆくという小説です。復讐に駆られた人間が、仇敵に復讐する。このような感情も人間

「侵略国」に自分が留学するという点については、二年前の生活の中で、そのわだかまりが少しずつ溶けていくのを、今私は実感しています。最近の日本を取り巻く様々な国際的問題、例えば「従軍慰安婦」や「PKO法案」の問題などを見ると、日本が成し遂げようとしている「国際化」の問題に、いかに過去の侵略戦争の事実が暗い影を投げかけているかを感じます。人間は前向きに生きなければならぬ、過去の事に拘っていてもしょうがない。歴史の教訓を大切にし